天理教とイスラームの出会い①

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

日本イスラーム史に残る中国巡教

昭和５（1930）年４月６日、中山正善２代真柱一行が中国巡教を行い、モスクを見学したことは、『日本イスラーム史』のなかでも言及されている。[1] 一行にモスクを案内した人物は、河村狂堂という人物であった。

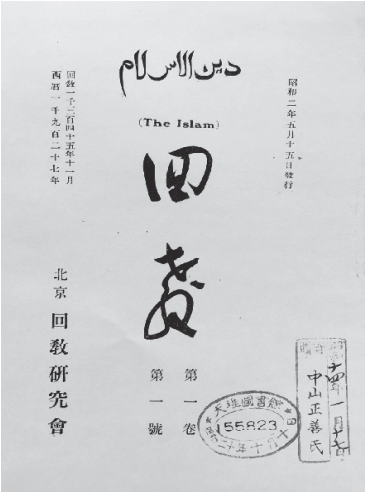

写真　河村狂堂が編集した『回教』
（提供：天理大学附属天理図書館）

河村はイスラームに改宗し、中国の回教政策に携わった人物であるが、その来歴はほとんど分かっていない。２代真柱は、東方文化事業所の瀬川という人物の自宅で、河村の紹介を受け、イスラームに関する説明を受けた。さらに、河村自身からモスク案内を受けると同時に、河村が代表を務めていた回教研究会発行の雑誌『回教』を入手した。

『回教』のほかに、中国で出版されたイスラーム文献が購入され、日本に持ち帰られた。それらは、２代真柱によって、昭和５年に開館した天理大学附属天理図書館に寄贈され、現在に至る。OPAC の情報によると、現存する『回教』全３巻を全て所蔵するのは、天理大学と京都大学のみである。天理図書館は、中国イスラームに関しても、資料的価値の極めて高い文献を数多く所蔵している。

２代真柱が巡教のなかで目にした中国のイスラームに関しては、『みちのとも』（昭和５年７月５日号）、『天理時報』（昭和８年４月30日～５月14日号）、そして『上海から北平へ』のなかでかなり詳細に説明されている。それらの内容は、礼拝の呼びかけであるアザーン、礼拝時刻の定め方、水を用いた「浄め」であるウドゥーなどの記述である。当時の天理教信者たちは、天理教の機関紙に掲載された２代真柱の説明を通して、イスラームを知る機会を得た。

> 北平には日本人で回教の信者になっている河村夜堂（ママ）と言ふ研究家がおられますが、私達も其の人に会って支那に於ける回教の状勢を話して貰ったのであります。大体回教はアラビアを中心に、アフリカ、中央亜細亜、印度辺りに弘通して居る宗教であるので、其の状勢は余り研究されて居ないのでありますが、殊に我国に於ては全然と言つても好い位知られて居りません。[2]

さらに、中国におけるイスラームについて、「儒教、仏教程に支那宗教としては聞かなかった。併し来て見てその見解を大いに修正すべきではないかと思った」と、率直な言葉が綴られている。[3] これは、中国ならびに中国伝道を考えるうえで、イスラーム理解が不可欠であるということでもある。この指摘は、今日でも色あせない非常に重要な指摘であろう。

「ぢば」と「マッカ」

「天理王命、教祖、ぢばはその理一つ」と教えられるように、天理教の「ぢば」は、親神天理王命が人間を最初に宿し込まれた地点であり、天理王命が鎮まる地点である。ぢばへの求心力は、教祖を慕う信仰とともに、天理教信者の根幹を成している。この意味で、ぢばは「聖地」の言葉にふさわしい。

イスラームでは、１日５回、マッカ（メッカ）の方角へ向かって礼拝をおこなう。イスラームの「聖地」は、アラビア語で「マッカ」（Makkah）と呼ばれている。しかしながら、マッカは欧米でMeccaとして紹介され、日本でも「メッカ」と表記されている。ちなみに日本語では、「ラグビーのメッカ・花園」のように、「聖地」を象徴する言葉として使用されている。

２代真柱は、聖地ぢばという空間についての宗教的意味を十分に理解していた。そこで、イスラームの聖地マッカ（メッカ）を天理教信者に分かりやすく説明するために、イスラームにおける礼拝の方角を天理教と比較しながら、次のように説明を行っている。

> 信徒達は参拝に際して何を「めど」にして拝むかといふ疑ひが起りませう、それは外でもない、メッカ Mecca を「めど」にして拝むのです。即ちメッカとは地理の上では単にアラビアに在る一都市で、回教の教祖マホメット（Mahomet）の生れ且死んだ地であると言ふに過ぎませんが、回教の信徒に取っては、恰も（あたかも）私達の「お地場」と同じ様に考へられて居るのであります。[4]

天理教信者が、信仰上の方角としてぢばを中心に礼拝するように、ムスリムたちもマッカを目標として礼拝する。

一方、河村自身も２代真柱一行を案内する以前に、天理教のぢばを認識していた。「回教とは何ぞ（六）」（1927年）のなかで、彼はイスラームの礼拝の方向を説明しているが、天理教に言及する。

> 日本の天理教に於ては、大和の丹波市を以て日本の真中であり且つ世界の中心であると唱へ、大本教に於ては丹波の綾部を以て世界の中心であると言って居るのであるが、それには夫れ夫れ相当の理由が付けられて居ることであろう。真逆（まさか）イスラム教の中心説を真似（まね）たものでもあるまい。[5]

河村は、天理教が世界の中心を有する宗教とみなすけれども、こうした考え方は決してイスラームをまねたものではないと説明する。『回教』は日本人読者を想定して出版されたものであったが、イスラームの空間論―礼拝の方角や聖地の意義―を説明する比較対象として、聖地をもつ天理教に言及した。こうした説明は、イスラームを知らない人々の理解を容易にしたであろう。天理教とイスラームの出会いは、２代真柱が出会った中国のイスラームだったのである。

［註］

（１）小村不二男『日本イスラーム史』、日本イスラーム友好連盟、1988年、74頁。
（２）中山正善「現代支那に於ける宗教運動（その二）」『みちのとも』（昭和５年７月５日号）、10頁。
（３）中山正善『上海から北平へ』、天理教道友社、1934年、343頁。
（４）中山正善「現代支那に於ける宗教運動（その二）」、11頁。なお、ムハンマド（マホメット）は、632年にマディーナ（メディナ）で死去した。
（５）河村狂堂「回教とは何ぞ（六）」『回教』（第１巻６号）、回教研究会、1927年、４頁。